

## 叶えたいこと

阿部 文子

私の生母、敏子は小岩井農場で育った。

父親が農場の事務官だったからである。第二人、妹一人の長女。両親と手伝い人一人の七名で暮らしていたという。他に男児二名は、幼くして病死している。

母は、二十八歳で夫、五郎と結婚し、北海道の開拓へ嫁入りした。

当初はテントの生活から始まったと聞き、驚いたものだ。その後、長屋を建て、次に丸太を積み重ねた家。今のログハウスのような上等の物ではないが、味わいのある家だった。その家で私達は育った。

父とのなれ初めを聞くと、今思えば母らしいと納得できる。

それは、兵隊さんに慰問の手紙を書き、同郷のよしみもあって、共に生活を送ることになったというのだ。

しかし、北海道のその地は、本籍が、熊牛原野という。今でもカモシカや、きつね等の出没する淋しい山の中なのだ。

最寄りの駅までは一時間もかかる。病院へ行くには一時間半。私の育った時でさえ外灯もなかった。若い娘が住みたいところではないだろう。

唯一の救いは、集落全体が家族のようだったことだろう。助け合わないと生きられなかったとも言える。

母は、第一子の兄が生まれた後のある日、父には内緒で「帰る。叶えたのむ」というだけの短い電報を、祖父宛に打ったそうだ。

何も知らぬ父は、親が急に来たので、何事かと驚いたという。

訳は聞かなくとも理解できるようだが、後に母が聞かせてくれたのは「だってね、赤ちゃん産んだすぐ後で動けないのに、父さんたら、ごはんは作ったよ！　と言って、山仕事に出かけてしまうんだから」ということだった。

父にすれば、子供が生まれ、嬉しさのあまり「頑張って働かなきゃ」と張り切って仕事に出かけた様子が、後の話から伺える。

厳寒の北海道の一月。広くはない家にしても、台所に置かれたごはんの所まで、立って歩いてゆくには遠かったという。

父には、枕元まで運んでくれる気配りの余裕がなかった。母も、育った環境から、持ってきてくれるものと思ひ、「お願いします」の一言を言わなかった。

母は、父親が来てくれ、顔を見たことで一安心、一件落着。実家には帰らなかったという。

出産後は、心も身体も疲れ果て、少々感傷的になる。私もそうだった。

そんな父も、私達にはとても厳しかったが、母には、いつも優しくかった。

外仕事をしない母は、家の子のほか近所の子供達の世話や、家中の人達の服を縫ったり編み物をしたりしていた。

また、おやつ作りには殊に手をかけてくれた。

大きなストープの中に、鉄製の柄の長い型を入れて焼くせんべいは、今の南部せんべいを思わせる美味しさだった。

また、じゃがいもの澱粉工場からもらってくる、大きな澱粉の塊をストープの中に入れ、焼いたら

外側からむいて食べるのも、今のクレープのようで美味しかった。

誕生日になると、誰の時も「ぼたもち」が出てくる。それは、大人の手の甲くらいもある大きさだった。ケーキは出てこなかったが、忘れられない味となった。

おやつ作りは、私の子育ての中にも受け継がれ、「下手でも自分の手で作る」と生かされている。

一方の父は、二歳の時、母親が死去。裕福だった家は、父親の酒飲みのため生活は一変し、苦しくなった。父は奉公に出されたという。子供を背負い、学校に行くも、泣けば廊下に出ていたため、勉強もままならなかったと聞かされたのを思い出す。

盛岡の女学校まで、小岩井駅から弟と二人、トロッコ通学をさせてもらった母にとっては別世界の話である。

小学校も十分行くことのできなかった父はいつも、新聞や本を手にする、必ず母の隣に座っていた。そして、字を教わったり、解説してもらったりしている光景が思い浮かぶ。

だからなのか、父と母の喧嘩は見たことがない。

いつか、母を育てた内地の祖父が「女は子供を育てるから勉強が必要だ」と言ったのも思い出す。私達六人の兄弟妹は、小学校登校前に、必ず仕事を与えられていた。

私は女子だから、床拭きと玄関そうじ、男子は牛舎の手伝いや、ニワトリの世話。グローブを欲しがると弟のためには、特別に豚の子一頭が与えられた。売れたら買ってあげると約束をして世話をしていた。一番小さい三歳の妹は、ポンプにぶら下がり瓶へ水を汲んでいた。

与えられた仕事を終えないと、遅れても学校に行かせない父だった。

だから母は、陰に回って私達の後始末をするこどもしばしばあった。

私のそんな生活も、小学校六年生の二学期までで終わった。

三学期からは内地、盛岡の祖父母、母の実家へ預けられた。突然に。それも、一度も逢ったことのない病弱な祖母のいる家だった。

北海道から来る時は、中学二年生の兄と二人で来たが、私が泣くのを考え、兄は、私の眠っている内に帰されてしまった。

その頃から、私の母に対する思いは、「子供をたくさん産んで、教育できずに手放す」と恨みにさえ変った。

後に、早く母親を亡くした父が「親は大切にしなければだめだ」と母を説得した上での事だと知った。

今でいう、高齢者の介護補助のためだったと、私もこの年になって理解できる。

母から言わせると「山にいたら学校にも行けなかったんだから——」とも。

しかし、当初は、毎日ただ泣いていた。祖父に見られぬように。眼が腫れて見えなくなるくらい泣いた。憲兵の祖父は、何かにつけ「お前を内地に来らせるのに、どんなに苦労したことか」とはじまる。義務教育の間に、養子とせずに預ることを説得するため、教育委員会にねばり強く通ったのだという。だから、口答えなど許されなかった。

私がお家を離れた後、母は、まめに手紙や、たくさんのお便箋を入れた小包を送ってきた。

私がお書くのは恨みだけ。それでもめげずに手紙や小包は届いた。嬉しさと悔しさが交差する心はどうしようもなかった。

その頃書いて出した私の手紙は、恐ろしいことに今も母の手に保管されている。

その母も、九十歳にして乳癌が発見された。と、いうか、自分の手で触れて発見したのだ。

報告を受けた私は「そんなしなびたおっぱい切らなくていい」と言った。すると母は「自分の身体に癌がくっついていいると思うと嫌だよ」と手術を受けた。

利き手側の右だったのが悪かった。

それまで趣味で短歌を詠み、友人と本を出してきたのが「筆を持って書けなくなった」とパニックになり、心も少し壊れた。

私はすぐ、色紙百枚と、たくさんの筆ペンを送った。「これに全部書いたら治るから」と励まして。真面目で頑張りやの母は完治して、元のきれいな字の手紙が届くようになった。ホッとした。

現在九十四歳。なかなか「手紙ちょうだい」と言っただけでは書かなくなってきた。

そこで好物を送ると「おいしいものがあるがとう。今、しじゅうからが庭の木に来ていますよ。またお願いね」という短い文章のハガキがくる。短くとも元気確認で「まあいいか」と思っている。

た。それがこのごろ、時として電話となってきている。それも「文子元気かい？ 母さんだよ、元気だよ。大きいさくらんぼ、とつてもきれいで美味しかったよ、ありがとう」

それだけ言うのと、ガチャンと切ってしまう。

それでも「元気な声を聞くのもいいか」と思ってしまう自分がいる。だがやっぱり、何歳まで手紙やハガキが来るか、楽しみでもあるから少し残念だ。

そこで、今度は何を送って反応を見ようかと思案する今日である。

五十二年間、私の誕生日を忘れず「おめでとう」と手紙をくれた母。六十四歳になった今、やっと母を想えるようになってきている。

自分に趣味があるということが、どんな境遇でも強く生きられるということも教えられた。

もう少し母が長く生きてくれることで、私が叶えてあげたいことのひとつは「短歌」の本。母がこれまで詠んできたものを一冊に仕上げてあげたいと思う。

そして、今年の十月一日、私の誕生日にはまた、「誕生日おめでとう」のメッセージが来ますように。